

令和6年度 第4回
丸山薫「帆・ランプ・鷗」賞 作品集



はじめに

丸山薫「帆・ランプ・鷗」賞は、子どもたちに詩を身近に感じてもらい、詩を書くきっかけとなつてほしいとの願いから、「はじまり」という意を込め、本市ゆかりの詩人・丸山薫の第一詩集「帆・ランプ・鷗」より命名いたしました。

第四回を迎えた本年度は、子どもたちの自由な発想や新鮮な発見を大切にするため、テーマを設けずに作品を募集しました。その結果、全国各地の小学生、中学生、高校生から、家族への思いや日々の出来事、身近な生き物とのふれあいなど、多岐にわたる題材を生き生きと表現した作品が寄せられ、詩が持つ可能性とこの賞を創設した意義を改めて感じることができました。

多くの応募作の中から厳正な審査を経て選ばれた入賞作品を、このたび一冊の作品集としてまとめました。受賞された皆さまに心からお祝いを申し上げます。また、この作品集を手に取りられた方には、子どもたちが詩に込めた想いや豊かな感性を存分に味わっていただければ幸いです。

この賞をきっかけとして、詩人・丸山薫を多くの方々知っていただくとともに、詩作を通じて子どもたちの創造力や感受性を育む場となり、詩がより身近な文化として広がっていくことを願っています。

最後に、この賞の運営にご協力くださった丸山薫賞運営委員会の皆さま、そして審査に携わってくださった選考委員の先生方に深く感謝を申し上げますとともに、応募してくださった全ての方々の今後のご活躍をお祈り申し上げます、発刊の挨拶といたします。

令和七年二月八日

豊橋市長 長坂尚登

目次

はじめに

【小学生の部】

入選作品	選者	高階 紀一	6
入選作品選評			21
選者作品			24

【中学生の部】

入選作品	選者	中本 道代	28
入選作品選評			45
選者作品			48

【高校生の部】

入選作品	選者	八木 幹夫	54
入選作品選評			68
選者作品			71

丸山薫の略歴と業績

【小学生の部】

選者

高階

杞一

「帆・ランプ・鷗」賞

ひみつの友だち

愛知県豊橋市立福岡小学校

三年 林 美瑠

優秀賞

感情の種

愛知県豊橋市立牛川小学校

三年 大橋 穂高

きず

徳島県美馬市立江原南小学校

六年 さた

なんで今

千葉県国府台女子学院小学部

六年 芳賀 堇

雨つぶ

愛知県豊橋市立栄小学校

六年 横松 世菜

セキセイインコのチョコボちゃん

愛知県豊橋市立野依小学校

六年 松橋 可奈

佳
作

手

愛知県豊橋市立栄小学校

五年 岩澤 咲月

ぴーぴーの歌

愛知県豊橋市立吉田方小学校

六年 山並 優菜

なぜだろう

愛知県豊橋市立栄小学校

六年 浅岡 優寿

プレゼント

愛知県豊橋市立岩田小学校

五年 篠原 ののか

どこにいるのかな

愛知県豊橋市立二川小学校

三年 itou そうすけ

元気なイモリの歌

愛知県豊橋市立つつじが丘小学校

五年 鈴木 咲都

とかげのにじちゃん

愛知県豊橋市立栄小学校

三年 村越 陽宇

あさがお

愛知県豊橋市立牛川小学校

一年 井上 あやと

あおくんのおはなし

愛知県豊橋市立牛川小学校

一年 まえだ はく

入選作品

「帆・ランプ・鷗」賞

ひみつの友だち

愛知県豊橋市立福岡小学校

三年 林 美瑠

まぶしい日ざしにあの子はいない
そつとふりむくとあの子がいる。

うれしくて手をふる

まねっこ まねっこ

わたしが2人

おいかけて来る

おにごっこ。

せなかにあせがながれこむ

あの子が前に表れた

ひかげに行つてかくれんぼ。

日なたに行つて ふふふ。

みーつけた。

クスクス。

さみしい帰り道

あの子といつしよに楽しい時間

おかえり

ただいま

ひみつの友だち

また明日

優秀賞

感情の種

ぼくの頭の中には「感情の種」がある
イライラすると怒りの種から芽がでて
花が咲く

怒りの花は 黒色で コチコチした形
よろこびの花は 黄色で丸い
悲しみの花は 青色で涙の形

あつ

お母さんの頭から

ピンク色の花が咲いている

どんな気持ちなのかな

愛知県豊橋市立牛川小学校
三年 大橋 穂高

きず

徳島県美馬市立江原南小学校

六年 さた

猛暑が続く夏休み
暑すぎプール開かれない
熱帯夜までセットされ
クーラーなしでは寝つけない
夜中に父に起こされて
車に揺られて熟睡だ
目覚めた朝は別世界
潮のおいがこちよい
ここはどこかと振り向けば
あたり一面焼け野原
ここはどこかと思まわせば
あたり一面家くずれ
人の気配もない場所だ
かつては朝市立ち並び
掛け声ひびく輪島では
正月以来変わりなく
今も被害が出たままに
酷暑のなつはここにも来てる
熱帯夜まで連れている
能登半島を巡っては

私の生き方どうなのか
地元の人はどうなのか
考えるにも
目の前の
焼け野原がもう
はきはきと
ひさんでつらくてならないと
語ってくれて
こともない
私に何かできるのか
私に何ができるのか
ないちえしほって考える
今は無力なことでも
見たままを伝えたり
学んで力つけ未来では
復興のため働いて
いけたりするようにはできる
誰もにやってくる被害
だからできることをする

なんで今

千葉県国府台女子学院小学部

六年 芳賀 董

今、ひいおばあちゃんが
やかれた

最後に思う言葉

考えなかった

考えられなかった

私の4歳ぐらいのとき

塗り絵、折り紙

楽しかったな

ただ、楽しそうにしゃべっている

今ひいおばあちゃんの体が

なくなつた

おじいちゃんの

お母さんがきえた

お父さんにとつての

おばあちゃんがきえた

私にとつてのひいおばあちゃんがきえた

ひいおばあちゃんにとつての
自分がきえた

ただ、私の、みんなの、
ひいおばあちゃんとの
思い出は消えないでほしい

せめて一人でも
覚えておいて
心はまだ楽しく
生きているから

96歳までじゃなく
100歳、1000歳
もつともつと

ずっと生きているから

雨つぶ

愛知県豊橋市立栄小学校
六年 横松 世菜

「いまだ！飛びこめ！」
雲の上から飛びこんだ

ぶつかる！

大きな飛行機だ

みんな分かれてあわててよけた

よけたところは雲の上

ふわふわしていて助かった

雲をぬけると鳥のむれ

鳥もあわてて飛びさった

どんだん街が見えてきた

ぼくたちを見てほえる犬
やわらかい毛にもぐりこむ

風を切って走る犬
必死につかまるぼく

ふりおとされたその先は

きれいにさいてる

アジサイの花

いいにおいにつつまれた

長い旅が終わった

ぼくはねむりについた

セキセイインコのチョコボちゃん

愛知県豊橋市立野依小学校
六年 松橋 可奈

こやの中
ソファの上
かたの上

頭の上
手の上
机の上

たなの上
冷蔵庫の上
ランドセルの上

エアコンの上
カーテンの上
お姉ちゃんの上

全てチョコボちゃんのおトイレです

ごみ箱の上でうんちしてほしいな

佳作

手

愛知県豊橋市立栄小学校

五年 岩澤 咲月

お父さんの手

ごつごつしている

お父さんは、毎日朝ごはんを作る

あくしゅをしたら

「今日はどうだった」と聞いてくれた

今日の出来事をたくさん話したくなった

お母さんの手

厚くてかたい

お母さんは、毎朝頭をなでて起こしてくれる

あくしゅをしたら笑顔で私をだきしめた

笑顔を見たら私も笑顔になった

お姉ちゃんの手

ふつくらしている

お姉ちゃんは、毎日勉強やテニスをしている

あくしゅをしたらつないだ手をぶんぶんふつた
わくわくして遊びたくなった

ハムスターのノエルの手

ピンク色でやわらかい

ノエルは、毎日回し車で走っている

あくしゅをしたら私の手のおいをクンクン
かいだ

すぐくすぐったくて、声を出して笑っ
ちゃった

私の手

たくさんのマメ

私は、毎日外で元気に遊んでいる

私の手をにぎっただけかは、どんな気持ちに
なるのかな

ぴーぴーの歌

愛知県豊橋市立吉田方小学校

六年 山並 優菜

ぴーぴーぴー

目を覚ますと

小さな鳥が鳴いている

枝を集めて何してる？

のぞいてみたら巣があった

中には卵があった

小さな可愛い卵

ぴーぴー ぴーぴー

鳴き声が増えた

赤ちゃん鳥が3羽

口を開けて待っている

お腹が空いているのかな？

お母さんを待っているのかな？

歌っているのかな？

ぴーぴーぴー

毎日合唱してる

あれ？

今日は声が聞こえない

静かだな

巣の中にはだれもいない

どこに行つたのかな？

出掛けてるのかな？

次の日もまた次の日も

声が聞こえない

さみしいな

また来年も歌を歌ってね！

なぜだろう

愛知県豊橋市立栄小学校

六年 浅岡 優寿

なぜだろう

おかあさんにたずねた
戦争はなぜ起きるの？

おかあさんはただ一言

相手を知らないからかな

知らないを考えてみた

知らないは恐怖だ

知らないは残酷にもなれる

なぜだろう

相手を知ろうとしないのは

知れば同じとわかるのに

大事なものはみな同じ

お姉ちゃんとケンカした

おかあさんは言った

まずは話しあいなさい

なぜだろう

知ることから始めたいと思った

きっと何か同じとわかるから

「そして戦争のない世界を想いたい」

プレゼント

愛知県豊橋市立岩田小学校
五年 篠原 ののか

雨からのプレゼント
雨をふらして水をくれる
みんなの所に降りそそぐ
緑のダムに水をみたく
けれど力加減に気をつけて
みんながおぼれちゃう

太陽からのプレゼント
優しい光をかしてくれる
ほら地面から芽
けれど力加減に気をつけて
地面がやけどしちゃう

地球からのプレゼント
いろんな生き物を乗せてくれる
生き物が乗る地球号
けれど気をつけて
転覆したら大変だ
みんなの地球大切にしよう

どこにいるのかな

いつもいるのに
今日はこないよ

ぼくの家ポストのうら
そこにすんでいるんだよ

たまに小さな手と

くるんと細いしっぽが

すき間から出ているんだよ

すごくかわいいんだ

いつもいるのに

今日はこないよ

ヤモリちゃん

ぼくはさみしい

早く帰って来て

ヤモリちゃん

愛知県豊橋市立三川小学校

三年 いとう そうすけ

元氣なイモリの歌

愛知県豊橋市立つつじが丘小学校
五年 鈴木 咲都

家に来たよ、新しい友達

ちっちゃなイモリ、とつてもかわいい

水そうの中でスイスイ、チャプチャプ

見ているだけで心がぼかぼか

家族みんなでイモリを見守る

「かわいいね」と声をかけて

愛情こめて育ててる

ごはんをあげると口をパクパク

近よってきて食べるよパクパク

水替えすると水がチャプチャプ

あわてたイモリがバシバシ泳ぐ

20年生きるってびっくりしたよ

ってことは私が大人になるまで一緒だね

とかげのにじちゃん

愛知県豊橋市立栄小学校
三年 村越 陽宇

とかげのにじちゃん水いれのしたでねむつ
ているよ

にじちゃんはまいにちねむってるよ
なんでまいにちねてるの

夜元気におきているからよ

ロウルケーキみたいにねているよ。

なぜまるまってるんだらう。

ピュンピュンピュンピュン

なぜ足が早い。

えものをとるために足が早い

土の中にあなをつくって

かおがちよこつとでるよ

にじちゃんはくりくりおめかわいいな

キラキラ光ってみえる

なぜにじ色なの
おしゃれがすきなのかな

きらきらほうせきみたいにしたいのかな

キラキラにじちゃんかわいいな

あさがお

愛知県豊橋市立牛川小学校
一年 井上 あやと

あつくなるあさ
ほくはおきる
あさがおに水をあげる

花はらっぱみたい
パッポー、パッポーと
げんきにあいさつしているみたい
ほくはうれしくなる

つるは木みたい
クルクル、グルグルと
たいようをめざしているみたい
ほくはおうえんする

たねは2つはいったたまねぎみたい
ニコニコ、キヤッキヤツと
なかよくおはなししているみたい
ほくは花になったきみにあいたい

あおくんのおはなし

愛知県豊橋市立牛川小学校
一年 まえだ はく

あおくん

ひとのものをうばう

へやをちらかす

おこつてばたばたする

おもちゃでたたいてくる

わるものみたい

あおくん

あまえんぼうで

ちつちやくてかわいい

よくわらつて

いつもはしつてて

ころんで

みているとおもしろい

みんなをえがおにする

ぼくにもぎゆつてしてくる

だいすきなぼくのおとうとあおくん

選評

「帆・ランプ・鷗」賞

ひみつの友だち

林美瑠

大人になってからも、影を見て、不思議な気持ちになることがあります。例えば、夕日を背にして歩いているとき、自分の影が長く伸びて、巨人にでもなったような気がするときなど。

この詩では、そんな自分の影を「ひみつの友だち」と呼んでいます。ひとりのときでも遊んでくれる、誰も知らない自分だけの友だち。そんな「ひみつの友だち」と鬼ごっこをして、楽しそうに遊んでいる作者の姿が目には浮かんできません。「まぶしい日ざしにあの子はいない」という一行目の始まり方もうまいなあと感心しました。また、「せなかにあせがながれこむ」という一行も、さりげなく日差しを背にしていることを表していて、小学校三年生とは思えない技巧の高さもうかがえました。

優秀賞

感情の種

大橋穂高

感情というものを植物にたとえた発想がおもしろい。お母さんの頭に咲いたピンク色の花は、きっとやさしい気持ちじゃないかと思えます。

きず

さた

元日の震災に続き、九月にも豪雨で多大な被害を受けた能登地方。その被災地の悲惨な現場を見て、「私に何ができるのか」と考える姿から、他者を思う作者のやさしさが伝わってきます。

なんで今

芳賀 董

ひいおばあちゃんの死は作者にとって初めての身近な人の死だったのでしよう。肉体は消えても思い出は消えない。そう考えることによって、死の悲しみを乗り越えようとする思いが伝わってきます。

雨つぶ

横松 世菜

雨の粒が雲から地上に落ちてくるまでを、長い冒険の旅としておもしろく描けています。最後、アジサイの花に着地した場面からは、雨つぶのホツとして幸せそうな顔が浮かんできます。

セキセイインコのチョコボちゃん

松橋 可奈

部屋の中を飛びまわるセキセイインコ。どこにでもウンチをする困ったちゃんだけど、それでも「好き」という作者の気持ちが行間から伝わってきます。

佳作

手

岩澤 咲月

握手を通して家族のぬくもりを感じ取る。その様子から素敵な家族の姿が伝わってきます。最後、自分の手からも誰かにぬくもりが伝わったらいなという作者の思いが感じられました。

ビービーの歌

山並 優菜

家の廂か何かに巣を作ったツバメの赤ちゃんの様子でしょうか。生まれてから巣立つまでの様子がかわいく描けています。

なぜだろう

浅岡優寿

世界中で起きている戦争や紛争。テレビから流れてくるその悲惨な映像に、胸を痛める作者の思いが伝わってきます。お母さんの答もいいですね。

プレゼント

篠原ののか

各地で起きている豪雨や猛暑の被害を通して、自然環境を保護することの大切さが書かれています。雨や太陽の光を地球からのプレゼントと捉えた着想がいいですね。

どこにいるのかな

いとうそうすけ

いつもの場所からいなくなったヤモリの行方を心配している様子が伝わってきます。早く帰ってきてくれたらいいね。

元氣なイモリの歌

鈴木咲都

こちらはイモリ。水槽の中にいるイモリの様子がよく観察されて書かれています。大人になるまでずっと友達でいられたらいいね。

とかげのにじちゃん

村越陽宇

こちらはトカゲ。この詩もよく観察されて書かれています。虹色に光るトカゲがいるなんて初めて知りました。

あさがお

井上あやと

アサガオの成長を観察している作者のわくわくするような様子が伝わってきます。来年、また会えたらいいね。

あおくんのおはなし

まえだはく

イタズラをして困らせる弟だけど、それでもかわいいと思う気持ち伝わってきます。

選者作品

ムカデ

高階 杞一

ムカデは
空を見ながら眩つぶやいた

みんなとお友達になれたらな……

詩集『空への質問』より
(一九九九年 大日本図書刊)

【中学生の部】

選者

中本
道代

「帆・ランプ・鷗」賞

星の歌

愛知県豊橋市立豊城中学校

一年 土屋 舞桜

優秀賞

ぼくの片目のねこ

愛知県豊橋市立東陵中学校

一年 伊藤 巧泰

フルーツと私

愛知県豊橋市立東陵中学校

二年 安井 遥泉

クラゲ

愛知県豊橋市立東陵中学校

二年 丸山 大翔

風

愛知県豊橋市立南陽中学校

二年 赤柄 柚希

めぐる彩る輝く季節

愛知県豊橋市立二川中学校

二年 村田 愛菜

佳作

春

愛知県豊橋市立東陵中学校

二年 崎下 莉沙

野球してて一番痛かった瞬間

愛知県豊橋市立東陵中学校

二年 鈴木 公太朗

幸せ

愛知県豊橋市立東陵中学校

二年 鈴木 芽依

月と太陽

愛知県豊橋市立東陵中学校

二年 戸崎 由菜

帰り道

愛知県豊橋市立東陵中学校

二年 林 凌功

夜の花

愛知県豊橋市立東陵中学校

二年 近藤 七海

私と楽器

愛知県豊橋市立南陽中学校

二年 島田 理央

花火

愛知県豊橋市立南陽中学校

三年 渡辺 祐篤

夏の夜の夢

愛知県豊橋市立南陽中学校

三年 彦坂 吏音

空

愛知県豊橋市立南陽中学校

三年 山口 壱歩

入選作品

「帆・ランプ・鷗」賞

星の歌

愛知県豊橋市立豊城中学校

一年 土屋 舞桜

今日も新しい星が誕生して

星達は歌を歌い始める

青の星は静かでおだやかな音色

聞いているだけでうとうととしてしまう

そんな魔法がかかった歌

赤の星は豪快な音色

はっと目を覚まし踊りだす

そんな魔法がかかった歌

白の星は忠実で生真面目な音色

誰もが真剣に聞いてしまう

そんな魔法がかかった歌

紫の星はおおらかな音色

ゆったりと身をまかせられる

そんな魔法がかかった歌

橙の星は胸が躍って熱狂する音色

我を忘れて頭をふりリズムにのる

そんな魔法がかかった歌

黒の星：ブラックホールはご機嫌な音色
見た目とは違う音色に惹かれてしまう
そんな魔法がかかった歌

今日も星は誕生している
今日も誰かが生まれてくるのだ

星はいつか散ってしまい
人はそれを美しいと言う
でも星達は悲しんで
お別れの歌をみんなで口ずさむ
地球だって歌っているのだ

今日も歌われる星の歌
見えないし聞こえないけれど
あなたの心にしつかりと届きますように

優秀賞

ぼくの片目のねこ

愛知県豊橋市立東陵中学校

一年 伊藤 巧泰

片目しかないおまえの目が
腹がへつたと言うもんで
またたびご飯でハイな気持ちにしてやろう
お前の舌べらザラザラと
ありがとうと言うもんで背中なでたら
そこじゃねえよとかまれたよ

ハトが怖いシャーツと言うもんでギヤーギ
ヤーカラスの真似して追っばらったら
何しとるだ？線のようなとんがった細い目
でぼくをじいとみる
そんな目でみんでおくれ
ゴロゴロゴロゴロお前の音が心地よい
祇園の花火の音がみたいと言うもんで
高い高いをしてやると下ろせやめろとキツ
クして僕がさわったところをなめ直す

テレビに映る戦う人間怖いと言うもんで
ぼくは片つぽある目をかくしたよ
ぼくはあんな人間じゃないからね

見えない目は実は未来がみれると言うもんで
ぼくは知るのが怖くて耳をふさいだよ

「ワシもケンカをするけどね
一対一でやるんだよ
それがケンカのやり方さ」

トキメキ探しに猫の集会へ行くと言うもんで
で行っておいでと手を振った
こんな世の中バカになっておどるしかない
からね。

フルートと私

愛知県豊橋市立東陵中学校
二年 安井 遥泉

ホールいっぱい響きわたる
輝かしい音色

流れるような美しい旋律
われんばかりの拍手

そんな情景を夢にみて

私は今日も

あなたとうたう

私が息を吸い込み吐き出すたび
あなたはきれいな音色でうたう
あなたといっしょにうたうたび
私の心は弾みだす

つくりだしたい

燃えさかる炎のような

大空をとびまわる鳥のような

静かに流れる川のような

そんなうたを

あなたといっしょに

つくりだしたい

そしていつか

あなたといっしょに舞台上に立ち

美しい音楽を

つむぎたい

そのために

私は今日も

あなたとうたう

クラゲ

愛知県豊橋市立東陵中学校
二年 丸山 大翔

一匹のクラゲが海を泳いでいる。

ユラユラ、ユラユラとても気持ちよさそうだが
ユラユラ、ユラユラ別のクラゲが集まってきた。

ユラユラ、ユラユラ気づいたらとつても大きな群れになっていた。

ユラユラ、ユラユラどんどん大きくなっていく
もう数え切れないほど大きくなってしまった
そして日が暮れ夜になった。

夜の海に浮かぶクラゲたちは、まるで夜の空
に浮かぶ星々のようだ。

朝になりもう一度海を見たがクラゲはもうい
なかつた。

風

愛知県豊橋市立南陽中学校

二年 赤柄 柚希

いろんな風があるけど

風たちは

どこからきているのかな？

びゅーびゅーと

急いで走っていた風は

どこからきていたのかな？

ひゅーと

ゆっくり

歩いていた風は

どこからきていたのかな？

遠い遠いところから

がんばって

走ってきたのかも

それとも

意外と近くから

歩いてきたのかも

もしかしたら

風は

いろんなところにいつて

たくさんの人と

会っているのかもしれないなあ

いま通り過ぎていった

そよ風は

どこからきたのかな？

そして次は

だれに会いに行くのかな？

めぐる彩る輝く季節

愛知県豊橋市立二川中学校
二年 村田 愛菜

風が吹いて美しく散る桜

ゆらゆら揺れる花たち

冬眠から目覚めて春を告げる生物

空から降る暖かい陽射し

春から優しい送りもの

気が付くと

美しく舞う桜の向こうに夏の足音

見上げれば広がる青い空

どこまでも続くあをの海

鳴きやむことのないセミの声

音楽室から聴こえるメロディ

私より背の高いひまわり

「どん」と夜空に咲いた大きな花

涼しげな風鈴の音

嫌なのは蚊の羽音だけ

いつの間にか

秋めいた

見上げた空は

高く、遠く、

決して手に取ることできぬひつじ雲

焼きいもの甘い香りに誘われて

紅葉が真っ赤に染まって

街も、私も、

オレンジの夕日に包まれる

頬を赤く染める北風

本当は色あざやかな花たちも

雪色に輝いて

街中に流れるクリスマスソング

心躍るキラキラと煌めく

イルミネーション

桃色の春、青い夏

オレンジの秋、銀世界の冬

季節はめぐる

私を彩る

どの季節も輝いている

佳
作

春

愛知県豊橋市立東陵中学校

二年 崎下 莉沙

冷たい風が
頬をなでる
しもがたち
雪がちらつく

まだ、春は初まったばかり。

雪溶け水が
水たまりを作り、
やわらかな新芽が
でてくるころ

雲一つないすみきった空
わたあめみたいなやわらかい陽差し
春のおとずれを祝福しているよう。

時は流れる。人の気も知らずに
休むことを知らずに
時は流れる
目ぐるしく回る季節
よく変わる風景

また、どこかで春が来ている

野球してて一番痛かった瞬間

愛知県豊橋市立東陵中学校
二年 鈴木 公太朗

野球のスパイクの足の裏は
金具だ

いわゆる金属

包丁のようにするどい

練習試合にサードで出場したとき

二塁ランナーが走った

グローブでタッチしに行ったら

スライディングせず

つっこんできて

僕のグローブをふんだ

地面のように

ふまれた時

すごく痛かった

手が熱くなつて

焼かれているみたいだ

謝りもせず

ベンチへと戻った

どうしたらそこでスライディングしないのか
ふんできたやつに

聞きたい

そして

なぜ謝らなかったのか

聞きたい

幸せ

愛知県豊橋市立東陵中学校
二年 鈴木 芽依

約二年前。

祖母は二度と帰らぬ人となった。

毎週教えてくれた習字。

頬が落ちそうなほどに、

美味しかった手料理。

花見。バーベキュー。

流しそうめん。スイカ割り。

人生の一ページに過ぎない

あの日々は、

当たり前だった

あの日々は、

まるで夢のように

儚く消えた。

手の届かない、

広い広い大空へと。

また喋りたい

遊びたい

笑い合いたい

見たい あの笑顔が

「ありがとう」って言いたい。

「頑張れ」って言ってほしい。

大好きだから。

大切だから。

ありがとう

たくさんの幸せを。

月と太陽

愛知県豊橋市立東陵中学校
二年 戸崎 由菜

今日も昼が終わり、夜がやってきた。

そろそろ交たいの時間だ。私が海の寝所から出ると太陽がこちらを見ていた。

「月よ、今日も地上はおもしろいのう。」

「ふん。ずいふんと気楽なことだな。」

昼の番、太陽とは昔からどうも気が合わない。

こいつの能天気さにはいつも苛々する。

相も変わらずそう憎まれ口を叩くとあいつは

何が可笑しいのか愉快そうに笑いだした。

やはりこいつとは気があわない。

「…月よ、今日は…何の日か憶えているか。」

太陽がしんみりといった。そうか、そうだったな。

「ああ。」

—今夜は日食、太陽・地球・月が一直線に並ぶことでおこります—

夜空には綺麗な金環日食が輝いていた。

帰り道

愛知県豊橋市立東陵中学校
二年 林 凌功

雨が降った日歩いてみると
まるで石が宝石のようだ。
近づくと石にもどってしまふ。
遠くの石は宝石のようだ。
僕はひきよせられた。
まるで罨のように。

夜の花

愛知県豊橋市立東陵中学校

二年 近藤 七海

地面から打ち上げられて
高い音がなり響く

大勢の人が見守りながら
いま

大きな一輪の花がさいた

すこしさみしげな顔をして

まるでこの世界から消えていくかのように

まるでこの世界を代表するかのよう

私と楽器

愛知県豊橋市立南陽中学校
二年 島田 理央

私は楽器の中に息を吹き込む

一音一音、うたうように

輝く日の光をうけて

楽器の中に息を吹き込む

私は指を動かす

一音一音、踊り出すように

指揮の上に乗っかって

指を動かす

私は息を吸う

大切な楽器をならすため

酸素達に鼓舞されながら

息を吸う

私の楽器はなく

感情豊かに大声で

私の息と協力し

楽器はなく

私は楽器と手をくむ

「歌」をプレゼントするため

いろんな人にはげまされながら

楽器と手をくむ

私は息を吹き込む

私は指を動かす

私は息を吸う

私の楽器はなく

私は楽器と手をくむ

私と楽器とあなたのために

花火

愛知県豊橋市立南陽中学校

三年 渡辺 祐篤

夏の風物詩といえ
ば
やはり花火

暑くなる夏に
心を涼しくしてくれ
る

今年見たのは

手筒花火と打ち上げ花火

手筒花火は

赤い火花が空へ吹き上がる

サーパチパチと吹き上がる

まるで地面に咲く花のようだ

そして最後にドンといって

赤い火花が消えていく

まるで花が季節を迎え落ちていくようだ

でもその姿が

私を強くしてくれる

打ち上げ花火は

白い光が空へ舞い花開く

ヒュードンと花開く

まるで空に咲く花のようだ

そして最後にフツと

白い光が消えていく

まるで花が季節を迎え散っていくようだ

でもその姿が

私の背中を押してくれる

そんな花火を

来年もまた見れたらいいな

夏の夜の夢

愛知県豊橋市立南陽中学校

三年 彦坂 吏音

ある夏の日の夜
黒く深い大気の中で
鮮やかな光が空に打ち上がる
小さな光の一粒一粒が
闇を照らし、きらきらと輝いた

よく見てみると
その輝きは
夏の夜の風景を
鮮やかに染めている

心地よい風が
さわやかに通り過ぎてゆく
赤いけむりが
海を照らしていた

ああ
花火よ
きみたちは色かたちそれぞれに
美しく空に咲き誇る

それは
音と光がつむぐ
すばらしい景色だ

この大きな海の上に
私の大切な思い出は
打ち上がり
花ひらき
やがてはらりはらりと空に溶ける
ほんの少しのさみしさと
せつなさを残して

ああ
花火よ 大輪の花火よ
きみとともに
この夏は
ぼくの前からゆつくりと
消え去ってゆくのか

空

愛知県豊橋市立南陽中学校

三年 山口 壹歩

青い空

雲がなければ海のように
海みたいにながめていて
空をずっとながめていると
空に吸いこまれそうだ

空の動きはいつも違ってみえる

まるで感情があるみたいだ
雨が降っているときは
泣いているようで
雷が鳴っているときは
怒ってるみたいだ
空も人の気持ちも
移り変わりが激しい

空は時間によっても季節によっても

見え方が違う
夕焼けが好き
いろんな色が重なり合う
その後には星と月が待っている

夜の空

こん色のじゅうたんが広がっているよう
星がきらきらと
空を照らしてくれる
月はいろんな形に変わって
空の形も変わって
空を美しくしてくれる
夏になると

花火があがる

季節によって
空の見え方は違う
人間の心も移り変わりが激しい
空もまるで
人間の心といっしょのようだ
人間も空も

いろいろなことで見え方は違う
どちらもつかめなくて奥が深い
つかめないものはもっと知りたくなるし
興味がわく

選 評

「帆・ランプ・鷗」賞

星の歌

土屋 舞桜

青、赤、白、紫、橙、黒と色々な色の星が、それぞれの歌を歌っているのですね。どの色がどんな歌になるのか、色に対して土屋さんもっているイメージが想像力豊かに描き出されています。夜空の沢山の星がみんな歌っていると思うと楽しくなって、心がどこまでも広がっていくようですね。そして、星も生まれて死ぬ、そのことの喜びと悲しみにも心が向けられています。地球はどんな歌を歌っているのでしょうか。

優秀賞

ほくの片目のねこ

伊藤 巧泰

猫の心の動きや動作、行動がとてもいきいきと描かれていて、目に見えるような楽しい作品です。猫は片目でも元気いっぱい、強そうですね。伊藤さんと猫が仲良しであることがよくわかり、心があたたかくなります。

フルートと私

安井 遥泉

フルートを演奏しているときの、フルートと一体になる感覚がよく表されています。燃えさかる炎、大空をとびまわる鳥、静かに流れる川、という比喩で安井さんがめざす音楽の美しさ、すばらしさを感じることができました。

クラゲ

丸山 大翔

クラゲを題材にした点がユニークで、面白い作品になりました。「ユラユラ、ユラユラ」という繰り返しの魔法で、読んでいる方もクラゲの姿を見ているような、またクラゲになって波に揺られているような気分になります。

風

赤柄 袖希

目には見えない「風」というものに想いを寄せています。風はどこから来て、どこへいくのだろう。目に見えないものを感じることが詩の始まりですね。疑問形を重ねながら風について想像する、素直な書き方が心を捉えます。

めぐる彩る輝く季節

村田 愛菜

春夏秋冬、それぞれの季節の輝きが丁寧な、彩り豊かに描き出されています。「決して手に取ることできぬひつじ雲」や「頬を赤く染める北風」に実感がこもっています。タイトルもたたみかけるようで楽しいですね。

佳作

春

崎下 莉沙

冷たい風、しも、雪、雪解け水、やわらかな新芽など、五感でとらえた春のはじまりの情景がよく表現されています。

野球してて一番痛かった瞬間

鈴木 公太朗

実際の体験が書かれているので臨場感があります。詩の題材で野球の試合中の出来事というのはめずらしいので面白いですね。

幸せ

鈴木 芽依

なくなったおばあ様から沢山の幸せをもらったのですね。おばあ様に会いたいという気持ちが強く伝わってきます。

月と太陽

戸崎 由菜

月と太陽の会話という発想がとても面白い。月は太陽に憎まれ口をたたきながら、仲良く並んできれいな金環日食をつくるのですね。

帰り道

林 凌功

雨に濡れた石が宝石のように見える、近づくると石に戻るといふ驚きが書かれています。自分だけの小さな発見を大切に詩した詩です。

夜の花

近藤 七海

「まるでこの世界から消えていくかのよう」「まるでこの世界を代表するかのよう」に花火の華やかさとさびしさがよく表現されています。

私と楽器

島田 理央

楽器と島田さんの一体感がよく伝わってきます。何の楽器が書かれていた方が、読む人にもっとそれが実感できるかもしれませんね。

花火

渡辺 祐篤

渡辺さんは花火の力強さに感動し、勇気をもらっているのですね。「まるで花が季節を迎え……」という繰り返し効いています。

夏の夜の夢

彦坂 吏音

彦坂さんは花火に自分の夏の終わりを感じて切なさを感じています。「赤いけむりが 海を照らしていた」に観察眼が光っています。

空

山口 壱歩

絶えず変化していく空を見つめ、人間の心の移り変わりや重ね合わせています。つかめないものをもっと知りたい、という心が貴重です。

選者作品

雪の日

中本道代

とても小さな雪の粒がふつてきた

石段に落ちてすぐにはとけず静まっている

暗い朝

はつ雪の先触れ

午後

雪はとめどなくふるようになる

思惟の遅さで（速さで？）

雪片は急いで舞いおりながら

いくらかは戸惑うように舞い上がる

口に含めば北極圏の味

憧れてもそこでは生きられぬことを伝えてくる

夕暮れ近く

雪は吹雪となって横なぐりにふる

カイヅカイブキの枝は雪を厚くまとい

何かを求めて荒れる怪物のように沢山の手を動かしている

深夜

暗闇の中を雪が吹きつけてくる

灯りのともる場所は白く奥深く輝き

尊いものがきらきらと湧きあふれているよう

引き寄せられて近づいて行っても

雪がふりしきっているだけ

雪は夜の谷にしんしんとつもり

谷は深く深くかたむいていく

いつかどこかで

私も雪片の一つになって

暗い谷へと舞い落ちていくまで

【高校生の部】

選者

八木 幹夫

「帆・ランプ・鷗」賞

杓子定規

愛知県立豊橋南高等学校

二年 須佐 真衣

優秀賞

ぼくの木

群馬県伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校

六年 藤川 晴奈

私はアゲハ蝶

愛知県立豊橋南高等学校

三年 中村 日南子

異国の風

大阪府大阪教育大学附属高等学校池田校舎

三年 ソーマソース

針

愛知県立時習館高等学校

二年 渡辺 成洋

雑

徳島県立脇町高等学校

一年 さとみ

佳
作

猫

愛知県立豊橋西高等学校

三年 うにの軍艦

恋の線香

愛知県立豊橋西高等学校

三年 しょうゆの魔人

苦手

愛知県立時習館高等学校

二年 本山 嘉芳

日々のハプニング

愛知県立時習館高等学校

二年 鈴木 麗央

君を見上げて

愛知県立時習館高等学校

二年 小島 帆乃夏

夏の主人公

愛知県立時習館高等学校

二年 金子 恵大

入選作品

「帆・ランプ・鷗」賞

杓子定規

白いものさしは好きですか
無垢な目盛りに彩られた
ひとを傷つける単位のない
ひとをはかる役割を持たない
純粹な定規は好きですか

青いものさしは好きですか
結ばれてはほどける少年少女
青く染められた春のなか
心の距離を何度もはかった
すり減った定規は好きですか

赤いものさしは好きですか
何度も自分の価値をはかった
誰かのものさしに傷つけられた
存在価値を切り刻む刃
血で目盛りが読めなくなった
いのちの定規は好きですか

黒いものさしができました
もう白にはもどらない
青い春にはかえれない
赤すら淡く感じるほどの
暗い定規ができました

愛知県立豊橋南高等学校
二年 須佐 真衣

白い光で目盛りを刻もう
落ちるかげを照らせるような
悪意に書き変えられないような
眩しい光の目盛りを刻もう

正しくなくても構わない
曲がっていても構わない
否定されても構わないから
もう二度と揺らぐことのない

「私」を

固定する定規をください

優秀賞

ぼくの木

群馬県伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校

六年 藤川 晴奈

僕の誕生日に木を植えました
裏山のとっぺんの秘密基地の隣の
開けた土地に木を植えました
小さな小さな木の苗に
葉っぱが二つ付いていました

パチンコ屋さんができていました
まだまだ細い木の苗に
葉は青々と茂ってました

去年植えた木を見に来ました
裏山のふもとに去年はなかった
ゲームセンターができていました
小さな木の苗は
僕の腰の高さで揺れていました

三年前植えた木を見に来ました
裏山が小さくなつたなんて思いながら
ちよつと古びた団地を横切りました
弱っちそうなの木の苗は
今年も風に吹かれていました

一昨年植えた木を見に来ました
裏山に来る道の途中に去年はなかった

四年前植えた木を見に来ました
団地に住む好きな女の子に
笑顔で手を振ってから来ました
木を軽く蹴ってみましたが

びくともしなくなりました

五年前植えた木を今年も見に来ました
スーツを着て証書をもって

友達と一緒に今年も見に来ました

たくましくなった木の苗を
囲んでおにぎりを食べました

六年前植えた木は見に行けませんでした
定期テストに部活に塾に今年は忙しくって
どうしても行けなかったんです

ビュンと東風が吹いても

木は堂々と立っていたのに

二十年前に植えた木を

久しぶりに見に行くことにしました
パチンコやゲームセンター

好きだったあの子の団地さえなくて
しばらく来ていないこの街は

ものすごく変わっていました

僕は歩きました

あの日植えた木を目指して

でも

歩いて行ったその先に

あの景色はありませんでした

裏山はありませんでした

平らな土地にビルが立ち並んで

人々が行きかいしていました

大好きだった秘密基地も

おにぎりを食べたあの木も

いくら探しても

見つかりませんでした

私はアゲハ蝶

愛知県立豊橋南高等学校
三年 中村 日南子

お花畑が見える

なんだろうこの気持ち

味わったことのないこの気持ち

そうだった

ミーンミーンと響くあの頃

あの私が宿題を手伝っていたんだ

初めてのポラントイアだった

けどもうずっと卵

みんなアゲハ蝶なのに

一人ぼっちで悲しかった

心にどんより雨が降る

けどその時一匹のアゲハ蝶が来た

おねえさん！こっからここまでせーんぶわか
んない！

モジモジモジモジ

私は芋虫になっていたけど

無理やりニコニコして

どれどれ見せてごらん

十年くらい前だろうか

懐かしいあの頃の問題を教えた

いつぶりだろう：教えてあげるなんて

大丈夫？私うまく教えられる？

必死にしがみつくさなぎになりながら

何とか教えた気がする

その後ありがとうと言われた

ばたっ

そしてまた私は変わっていた

さなぎから蝶に

こんなにも内気だった私の何かが変わった

私は言った、こちらこそありがとう

帰り道

空は雨なのに

私は快晴だった

ぱあっとお花畑が見える

あそこに蝶がいっぱいいる

バサッ

行ってみようかな

異国の風

大阪府大阪教育大学附属高等学校池田校舎

三年 ソーマソース

初めて降り立ったその地で、

言葉は風のように速く、

理解できぬ音が耳をかすめた。

友だちの笑い声も、

教室で交わされる言葉も、

まるで別の世界のものだった。

でも、風の音を聴くように、

少しずつ、その言葉が響くようになった。

図書館の静かな空間で、

ひとり、辞書をめくりながら、

一つひとつの単語が輝きを増し、

やがてそれは、私の言葉となった。

サッカー場で共に走る仲間たち、

彼らの言葉も、私にとっての音楽に変わった。

ボールを蹴る音、

ゴールの歓声、

そして、勝利の喜びを分かち合う瞬間。

最後の別れの時、

友だちの笑顔が、

私に語りかける。

「また会おう、いつかこの地で」

その言葉はもう、風ではなく、

心に刻まれた確かな響き。

異国の風は、

私に言葉を教え、

そして友を与えてくれた。

今ではその風が、

私の背中を押して、

新たな道へと導いている。

針

愛知県立時習館高等学校
二年 渡辺 成洋

ところどころに

針が落ちている教室を出て

踊り場に

針が落ちている階段を下り

激しく

針が飛び交うトイレに入る

人を刺す言葉に満ちた

この世界で

私は誰を

友と呼ぶべきか

雑

徳島県立脇町高等学校

一年 2022

心の中が雑多な状態

雑踏の中で

雑な仕事をして

雑誌社たちは

雑居ビルで

雑魚寝しながら

雑誌をつくりあげる

それは雑感のはずなのに

周囲からの雑音など気にしない

雑務も誰かに押しつけて

雑役係が疲弊する

雑貨もほとんど使い捨て

雑菌なども気にしない

雑穀米など健康マニアの食べるもの

悪口雑言も歓迎だ

種々雑多なネット社会

雑学は学べても

雑談する場にはなっても

乱雑な状況下で本音など語れない

雑炊でお腹を満たし

雑魚を相手に

雑記まとめ

雑種は野良に

雑用はボランティアに

複雑な世の中を単純化して

雑木林も針葉樹林に

雑草伸ばし放題

地震

暴風雨

土石流

河川の氾濫

猛暑

酷暑

惨状はデジタルな情報へ

映像付きで送られて

画面上で眺めては

自分のこととはならないで

雑多な情報と束ねられ

雑に扱われ

雑然と消えていく

複雑怪奇な世の中よ

★
佳
作

猫

昼下がりの窓辺に猫は丸くなって眠る
柔らかな毛並みをそよ風が優しく撫でていく
時々、夢の中で小さな足がぴくぴくと動く
何を追いかけているのだろう
目を覚ますと、猫はゆっくり伸びをしてまた
気まぐれに歩き出す
どこへ行くかは猫だけの秘密

愛知県立豊橋西高等学校
三年 うにの軍艦

恋の線香

愛知県立豊橋西高等学校
三年 しょうゆの魔人

せんこう花火が泣いている

大きくふくらんだ光は

自分のすべてをかけるように重たくぶら下がっている

あれだけ強く込めた思いが

「チッ」という音と供に風に奪われた

心に大きな穴があいた

あの光が全てだったのに

苦手

愛知県立時習館高等学校
二年 本山 嘉芳

詩を書くのは苦手だ
ずっと前から苦手だ
読書感想文も
生活作文も
美術の授業の抽象画も
自分で何かを作り出すのが苦手だ
自由な発想ができない
自分ですべてを決めるのが怖い
言われたとおりに
周りに決められたようにしているほうが
正直楽だ
親の望むように
先生の望むように
勉学に励み
難関大学を目指し
そうすることで決断から目をそらす
詩を書く
それに気づいてしまう

日々のハプニング

愛知県立時習館高等学校
二年 鈴木 麗央

朝、目が覚めた

あと出発まで十分

身支度ができてない毎日

目覚まし役の母の声がして

急いで電車に乗ったら忘れ物

ああ悲しい

学校に着いて

忘れ物した教科がやってきた

思い切って言って怒られた後

席に戻ってカバンを見たら

教材があった

ああ悲しい

授業中めずらしく

先生の話を一生懸命聞いていたけど

眠くなり寝てしまった

その直後先生が指名してきた

ああ悲しい

帰りの電車で

ゆっくり歩いていたら

あと1分で出発

走ってホームにたどり着いたら

いっちゃった

ああ悲しい……

君を見上げて

愛知県立時習館高等学校

二年 小島 帆乃夏

君は青。

真っ白な雲を抱えて

まるでソーダフロートみたい

飛行機が描いた

まっすぐな一本のスケッチ

君の青を彩ってる

君は灰。

君の涙が降ってくる

静かに小さな音を立てて

そこからのぞいた君の青

気付けば架かる

君への七色

君は燈。

燃えるようにゆらゆらと

光を受けた

赤紫の雲の嶺

夕日がかくれんぼし始めて

君の赤も薄れてゆく

君は藍。

白く輝くまん丸に

きらきらまたたく金平糖をそえて

時折吹く風に

半透明の雲がなびく

君の藍は浮かぶ宝石箱

そんな君を今日も私は

見上げてる

夏の主人公

愛知県立時習館高等学校
二年 金子 恵大

白球に想いを

乗せて

背番号に期待を

込めて

あの空より

青く

太陽より

輝く

その姿に

どんな過去が

あつたのだろう

魂の一振り

で奇跡を起こしに行こう

夏の主人公

選 評

「帆・ランプ・鷗」賞

杓子定規

須佐 真衣

定規というものさしでさまざまなモノを測る。人の命や自分の心をきちんと測る定規。はたして寸法通りに相手の心の動きや自分の心を白や青や赤や黒のものさしで正確に測ることはできるのだろうか。青春の、心揺らぐ時期の不安やときめきを須佐さんは定規というメタファーで捉えようと思いました。おそらくさまざまな対人関係や友人とのやり取りに苦しんだことがあり、須佐さん自身も自分のこころの置き所に苦しんだからこそ生まれた作品。自分を含め他者のこころを杓子定規に測ることの難しさが率直に伝わってきます。

優秀賞

ぼくの木

藤川 晴奈

シエル・シルヴァスタインの「The Giving Tree」(村上春樹訳「大きな木」)は有名ですが、藤川さんの「木」は時間の経過を木の成長で示し、「ぼく」も成長、その都度見に行きますが、街はすっかり変わってしまいました。哀愁ある作品です。

私はアゲハ蝶

中村 日南子

人にものを教える経験を蛹から蝶に変身したかのように表現されたこの作品は不思議な読後感がある。時間の交錯も不思議だ。アゲハ蝶になったのは誰なのか。お花畑を見ているのは読者なのか。作者なのか。(注。本文の21行目「私うまくおしえられてる? ↓おしえられている?」と修正。)

異国の風

ソーマソース

外国体験をしたのでしょうか。異国の言葉は耳元を風のように通り過ぎ、すぐには理解できない。やがて図書館で学ぶうちに単語が輝きます。サッカーを通して友情も芽生えた。異国の風が現在のソーマソースさんの背中を押す。

針

渡辺 成洋

悩みを抱えている姿が針という言葉に象徴されています。この針がやがて柔らかなものに変化することを願ってやみません。若い時期には何度かこうした針地獄にであうことがあります。逃げずに友人に心を開いてみては。

雑

ささ

雑という文字から様々な表現が繰り出されています。語彙が豊富であることは自在な表現が湧き出るといふこと。さささんは本を沢山読んでいます。興味関心をさらに広げて。雑念を払ってさらに雑学。

佳作

猫

うにの軍艦

猫の気まぐれ。寄ってくるかと思えば、ぷいとそっぽ向く。甘えてきても餌なんかあげるものか。ゴロニャーゴ！おう、よしよし。

恋の線香

しょうゆの魔人

線香花火の一瞬の輝きと恋の光。「チッ」で消えてしまった失恋。あれがすべてだったのに。

苦手

本山 嘉芳

詩を書かせられるのは嫌だと一度は思ったことがありますね。何故でしょう？詩を書くとき心が正直にさせられるから。この不思議。

日々のハプニング

鈴木 麗央

朝からハプニング。目覚まし、乗車後の忘れ物、その教科の先生にしかられ、鞆を見たら忘れたはずの教科書がある。居眠りすればあてられて、悲しい、可笑しい。

君を見上げて

小島 帆乃夏

君とは空のことなのでしょいか。飛行機雲、空からの涙、雨、そして虹。夕焼けの雲。藍色の宝石箱のような空。空を形容する詩句。

夏の主人公

金子 恵大

さわやかな球児の姿。一人一人の選手の過去を振り切るように夏の主人公たちが元気に活動する。空は青く、太陽はかがやく。

選者作品

里芋

八木 幹夫

陽のあたる玄関先に

里芋とその茎が干してある

黒光りした縁側に猫が一匹

三和土たたきの奥に

目をもつ闇がかがみ込んでいる

畑仕事をおえた女が

坂を登りきって

前庭のたまり水で鍬を洗う

ほれ どなたさんでしたか

お茶でも飲んでいきなされ



藁葺きの家

茹でた里芋と甘煮の茎

すすきが夕暮れの風にゆれ

話をしている二人は

すでに半分消えかけている

詩集「郵便局まで」より

(二〇一九年 ミッドナイト・プレス刊)



丸山薫の略歴と業績

明治三十二年 六月八日大分県生まれ。

明治三十八年 内務省官吏の父の転勤で京城（ソウル）へ移住。

明治四十四年 父の死により母方の祖父の地、愛知県豊橋市に移る。

大正 七年 東京高等商船学校（現・東京海洋大学）に入学。病気のため退学。

大正 十年 第三高等学校（現・京都大学）に入学。

大正 十五年 東京帝國大学（現・東京大学）に入学。

・昭和元年 第九次『新思潮』同人となる。

昭和 三年 高井三四子と結婚し、詩活動に専念。

昭和 九年 堀辰雄、三好達治と詩誌『四季』を創刊。

昭和 十年 第一回文芸汎論詩集賞を受賞。

昭和 二十年 山形県西川町岩根沢に疎開。岩根沢国民学校代用教員を務める。

昭和二十三年 疎開先の山形県西川町岩根沢から愛知県豊橋市に戻る。

昭和二十四年 愛知大学講師、後に教授となる。

昭和二十六年 中部日本詩人連盟結成、委員長となる。後に中日詩人会に改組され、引き続き会長。

昭和三十二年 第十回中日文化賞を受賞。

昭和四十二年 旧四季同人を中心に詩誌『四季』を復刊。

昭和四十九年 愛知県豊橋市の自宅で永眠。

丸山薫の作品には、第一詩集『帆・ランプ・鷗』をはじめ『幼年』『物象詩集』『青春不在』『連れ去られた海』『蟻のいる顔』など十六冊の詩集と、短編小説集『蝙蝠館』、エッセイ集『蟬川襍記』、その他多くの詩選集『丸山薫詩集』がある。

没後、昭和五十一年に『丸山薫全集』全五巻が刊行され、さらに平成二十一年は、丸山薫の生誕百年、没後三十五年に当たるため、全六巻からなる『新編 丸山薫全集』が刊行された。

豊橋市高師緑地には発起人桑原武夫氏らによって丸山薫詩碑が建立され、愛知大学豊橋キャンパスには、愛知大学短期大学部同窓会によって丸山薫作詞の学生歌の詩碑が建立されている。その他にも、山形県西川町には詩碑、丸山薫記念館がある。



丸山薫「帆・ランプ・鷗」賞は、丸山薫賞の運営委員として丸山薫の業績の顕彰と普及に取り組み、本市の文化振興にご尽力された「故 神野信郎氏」によるご寄附を財源に、実施しています。

令和六年度 第四回
丸山薫「帆・ランプ・鷗」賞 作品集

令和七（二〇二五）年二月八日 発行

発行 豊橋市文化・スポーツ部「文化のまち」づくり課

〒四四〇一八五〇一 豊橋市今橋町一番地

電話 〇五三二一五一―二八七四

FAX 〇五三二一五六―一〇八一

E-mail bunka@city.toyohashi.lg.jp

印刷所 榊朝倉印刷

✿表紙・裏表紙イラスト 佐野 妙

